

国内研修成果報告書

① 人と馬によるまちづくり

私たちは、『馬の住環境・人馬の触れ合い・地域の馬産業と関連産業への理解』の三つを軸に「人と馬によるまちづくり」にはどう言ったのがあるのかを考えました。事前に私たちは、地域に根付いた馬産業は、関連産業に対して昔と比べて影響力が小さく、今後人口減少と少子高齢化に伴い衰退し、近い将来無くなってしまう産業であると考えていました。しかし、世界に目を向けてみれば、貧困地域の農業だけでなくヨーロッパでもまだ馬産業を行っている国があります。セネガルには10万頭の馬がいて馬政局長がいるくらいです。そこで私たちは、一般社団法人馬搬振興協会（岩間敬さん）の協力のもと、馬と人の関わりがまだ残っている岩手県遠野市に行き馬搬を見学・体験してきました。またそこでは、馬と人の関わりや、実際に共存している馬の住環境について岩間さんから講話をしていただきました。

まず早朝に馬搬を見学・体験させていただけるということで現場に到着してすぐ輓馬と呼ばれる牽引に適した馬と対面しました。およそ1トンも体重があるそうです。今回の馬搬は山の間伐などで出た木材を運ぶというものでした。基本的に重機では入ることができない場所かつ人力ではどうしようもない場所を、馬の力を使って運び出します。人が登るのも厳しい斜面を、馬を操りポイントまで一緒に向かい、輓馬と木材を繋げると、そこからは圧巻でした。はじめは、木材を動かす輓馬の迫力と力強さに圧倒されます。次に、岩間さんの技術に圧倒されました。よく観察すると、木材の大きさ・斜面状況・輓馬が通ることができるルートの確保など全てを把握し手綱を通して輓馬に伝え実行する。やはり輓馬と人の間に信頼関係がないと輓馬もいうことを聞いてくれないそうです。実際に私も体験しましたが、輓馬の力に負けたり手綱を通した意思疎通が上手くいかなかったりと難しかったです。

その後、実際に家で馬を飼育しているお家にお邪魔して、そこで岩間さんから講話をしていただきました。その中で印象的だったのは、馬から見えるサスティナブルな社会ということです。山の間伐材の搬出にしても、重機ではガソリンを使用するし排気ガスも出る。さらには重機が通るために不必要に木を伐採する必要があるという現実があります。馬ではその必要がありません。岩間さんの今後の展望として海外進出を皮切りに馬から見えるサスティナブルな社会の実現を目指しています。馬と人が一緒に街を作っている国々に行き、自分のノウハウを伝えたり他から吸収したりしたいそうです。今では、東京大学と「馬車による畜力発電」を共同開発されていて、実際にセネガルで検証実験を行なっています。この他にも、エチオピアで荷馬車や牛耕を調査・研究も行っています。かなり国際的に活躍されていますが、遠野市でも技術者の育成やイベントでの馬の派遣・馬を使った草刈りなど国内でも活躍されています。世界では馬を使ってゴミを収集したり農業をしたりす

る国があるそうです。日本でも機械を馬に変換することで少しでもサステイナブルな社会の実現に貢献できると感じました。最後に遠野市で抱えている馬や個人で所有している馬が夏場の暑い時期、高原で過ごすとお聞きしたので荒川高原に行ってきました。平地よりも体感5度以上低く感じました。馬の住環境という面で、一番は自然に近い形で放牧することだそうです。だからと言って馬舎で過ごすのがダメかというそうではなく、飼い主に愛情を注いでもらい、人と接することで馬が優しくなったり人に慣れたりすることで、飼い主もまた癒されるという好循環が生まれるとのことでした。



岩間さん（左上）の講話

② 震災からの復興プロセス

私たちは、東日本大震災でかなり大きな被害を受けた岩手県陸前高田市に行き、震災当時の様子や被害状況を教えてもらいながら、震災から12年経った現在の陸前高田市を視察してきました。

陸前高田市の被害は、震度6弱・津波の高さ18.3m・死者・行方不明者1881人（消防官殉職者34人）・津波浸水面積は13km²とそんなに大きくはないものの犠牲者率は10.64%で被災地の中では最も高い割合になっています。被災地の中ではかなり大きな被害を受けた地域になります。

市内視察と事前調査を通して私が感じた、震災から今までの復興プロセスの中で疑問に思ったことを二つ報告します。震災前や当時は日本百景に選出される一万本の松原があり、多くの住宅やスーパーや公共施設など活気あふれた市街地でしたが、現在は空き地が多く、たくさん建っている電柱ばかりが目立ちます。これまでの復興プロセスとして、陸前高田市は気仙町にあった山を切り崩して市街地を平均12.3mの大規模かさ上げ工事を行いました。しかし、実際にかさ上げた土地に住民は少なく、代わりにサッカーコートや野球場・かなり開放的な公園が建設されていました。震災直後家や家族を亡くし、避難所生活や仮設住宅で生活していた人た

ちが、かさ上げ工事の達成を待てず、自ら高台に土地を買い新しく家を建てたことがこの問題の背景として考えられます。個人的に感じたもう一つの疑問は、海岸沿いに大きな堤防を建設したことです。震災前は市街地からでも海が見えたそうですが、現在は全く見えません。さらに進撃の巨人に使われるような直立型の堤防が海岸に沿って建設されています。私の第一印象は海を拒絶しているように感じました。もっと海や山と共存した景観づくりやまちづくりがなされるべきだったのではないかなと感じます。

次に震災復興祈念公園を訪問し、当時の被害状況や慰留品などを見てきました。屋内施設には、壊された当時の消防車や橋の残骸が展示されており津波の威力を感じました。さらに映像資料室が複数存在しており、津波が流れている映像や市役所職員の動き・支援してくれた人たちの想いや行動が録画されていました。その中でも、震災当時の様子を時系列に記した部屋があり、親を亡くした子・親が見つからずに探している家族・目の前でご遺体が発見された家族・子を抱き抱えたまま亡くなったお母さんなど色んな状況が記されていて、読みながら涙を流してしまいました。屋外には津波に耐えた奇跡の一本松や被災したホテル跡が保存・展示され海側には新しい松原を作ろうとたくさんの小さな松が植樹されていました。過去に囚われず未来に向かっていく姿を感じさせる施設で感動しました。

私は陸前高田市が出身で当時小学2年生でした。おそらく当時を鮮明に記憶している最後の世代だと思います。誰かに東日本大震災を伝えないといけないとずっと思っていたので、今回達成できて嬉しかったです。同時に自分も知らない当時の状況を12年ぶりに知ることができて嬉しい反面、無知で悔しい気持ちもありました。この国内研修を通して誰かに発信できてとてもいい機会でした。ありがとうございました。



当時使われていた消防車



破壊されたホテル